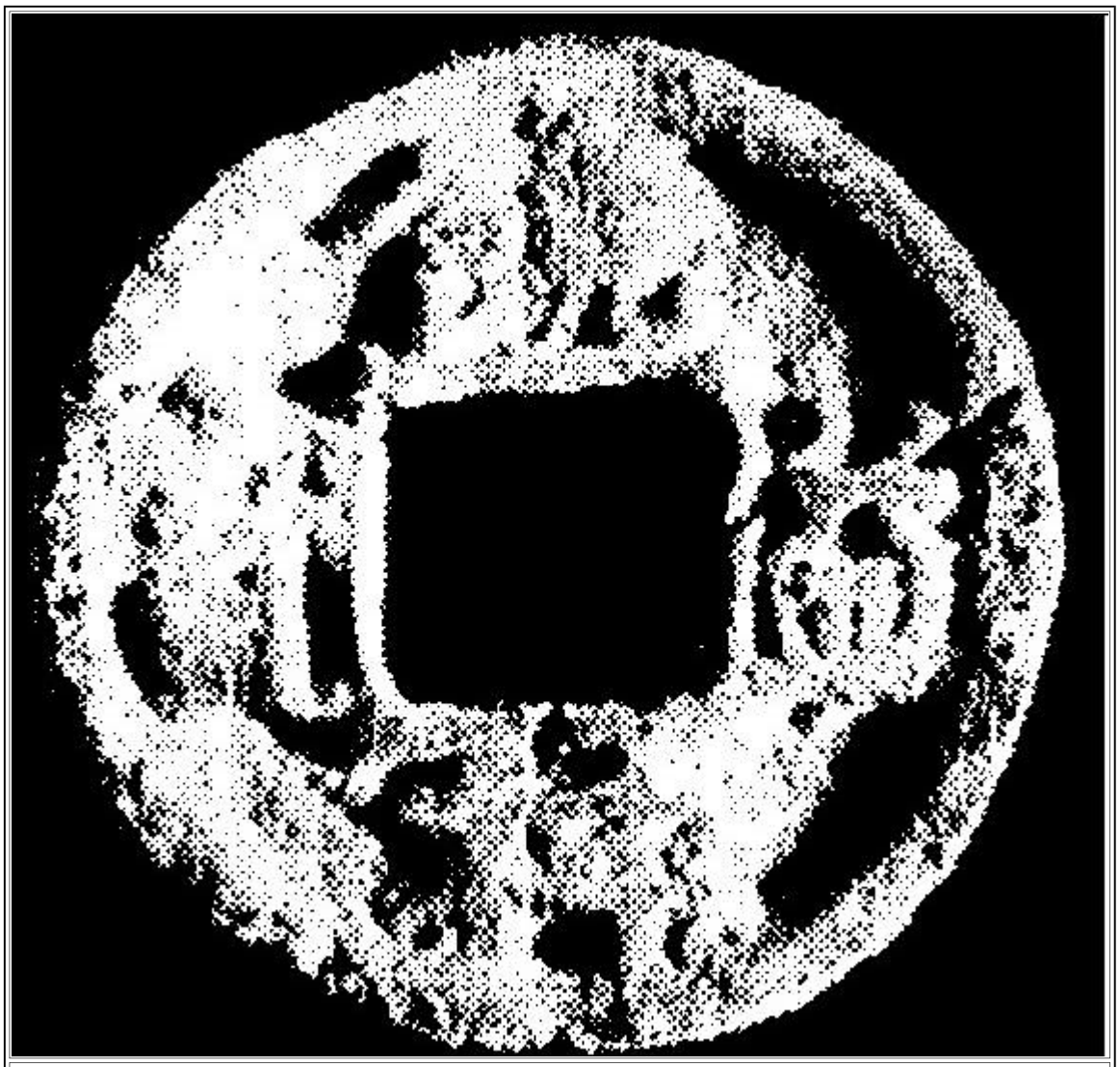
平安時代の古銭が出土
祭りなど儀式で使用か

県内初、妻沼の飯塚北遺跡で



発振された国産の銭「饒益神宝」／写真提供・県埋蔵文化財調査事業団

県埋蔵文化財調査事業団が調査を進めている大里郡妻沼町永井太田の飯塚北遺跡で、建物跡から平安時代に国内で鋳造された「饒益神宝（にょうやくしんぽう）」と呼ばれる古銭が一枚見つかった。県内では初めて出土した。

古銭は直径約一・九センチ、厚さ約一ミリの銅製。見つかったのは同遺跡の北東部の竪穴住居跡で、床の上に置かれているような状態だった。

饒益神宝は平安時代前期に鋳造された銭で、朝廷が中国の「開元通宝（かいげんつうほう）」をまねて発行した皇朝（こうちょう）十二銭の一つ。しかし、中国産の銭と比べ貨幣としての信用は低く畿内以外ではあまり流通しなかったようだ。

同事業団は「国産古銭の流通量から見て、貨幣としてではなく、地鎮祭などの儀式の中で使われたのではないか」と見ている。

（朝日新聞　１９８９．１０．２１　朝刊　２７面　東埼玉　１３版　より転載）